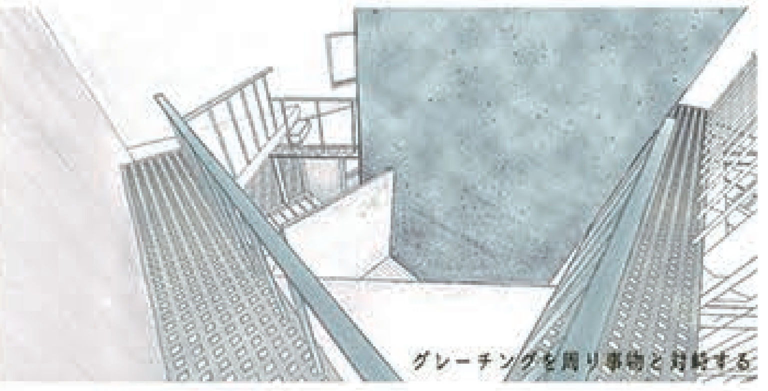
Villa in newtown

工業化住宅が保っていた完全性が過渡期を迎える。竣工と同時に解体の時まで時を止め、ヒトの暮らしを支えてきた住宅は、空き家となり事物となって最後の時を待つ。そんな過渡期の家の最後を迎えるまでの姿を提案する。

住宅だった事物と混入する生態系の時間軸の中に身を置く

地面から空まで切り取る窓は自分の居場所を確認させる

外部に現しの小屋組越しに空を見る



グレーチングを周り事物と対峙する

事物が並列に並ぶ

環境を引き込む

縮小時代のニュータウン /Background

縮小時代の入り口である今日において、空き家率の増加などが顕在化している。成長期に作られた床が過剰な床として見捨てられいってる現状の中、それにも関わらず、床の供給は現在も続いており需要過多と言っていいだろう。空き家のほとんどは維持管理の手が届かずに街中に放置されている。また、現在空き家率の低下が顕在化していない都市にも、人口減少が続くと予想される未来においてその存在を無視できなくなるだろう。

fig ニュータウンの風景

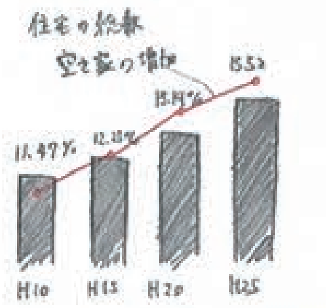


fig 空き家率の増加 (NPO 法人空き家管理センター)

空き家率の増加が加速する地区として考えらるのが 1970 年代に建造されたのニュータウンである。社会的に持ち家志向が強く支持され、子育て世代の多くは都市郊外に広がるニュータウンに移り住んだ。その世代が高齢化し空き家が多く生まれている。街、道、家、部屋とそれぞれが関係性を築かず、自己完結ツリー構造を取るニュータウンの中に取る、空き家という完結性を欠いたものが街に転がりだす。

完結住宅の定義 /Definition

ノイズ (noise)	ヒトの暮らしを脅かすネガティブとされていた要素
完結住宅 (Industrialized house)	戦後に建てられた工業化住宅。変化を恐れ、時を止め、ノイズを只管排除した工業品。

建築が事物に変わる時 /Survey

住宅は、たくさんの事物の塊であった。木・鉄・ガラス・コンクリート・高分子材料が意味として纏めあげられてしまっていたのである。事物として解放された住宅は、風や雨、空気などの外的要素、植物や鳥などの生態系要素と同列に並ぶ。そうした視線をもつことは、ニュータウンやベッドタウンなど意味の入れ子構造とも言える街の視線に変化をもたせるきっかけになるのではないか。

同列的な事物を混在 /Concept

提案は、ニュータウン の空き家を個人所有の別荘として転用することである。都市に住む文化人の隠遁思想を体現している別荘を、ニュータウンに住む平均的な家庭収入でも購入可能な空き家を改修し実現できるのではないかと考えた。

とのことは人工環境から自然環境へと隠遁する本来の別荘の成立状況とは逆行し、人工環境に自然環境を輸入することを意味する。従来の自己完結したニュータウンに別の生態系混入し、様々な要素が連関するジョイントとして都市環境に貢献するだろう。従来型とは異なる、自宅から徒歩 5 分の別荘である。

fig 新築から解体 その瞬間性

人の管理が及ばない空き家は、本来住宅が排除してきたノイズ・植物、虫、雨など・が侵食していく。この状態に事物の並列性を感じる。それまでの主従関係が崩れた時、柱はただの木材として、窓はただのアルミとガラスとしてなどのように、意味から漂白されただの事物に還元されるのだ。この空き家や廃墟に特有の空間性を保存しながら改修することで、連関性のないツリー構造状、街を並列的事物として見る視点が生まれると考えた。そのとき、人は街に対して優しさを持ってふるまえるのではないか。

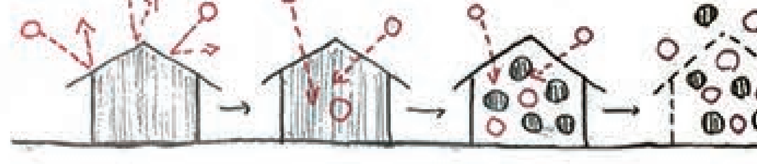
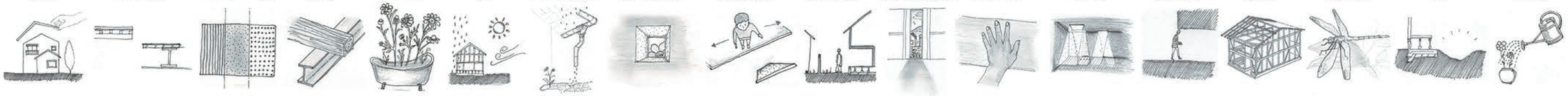


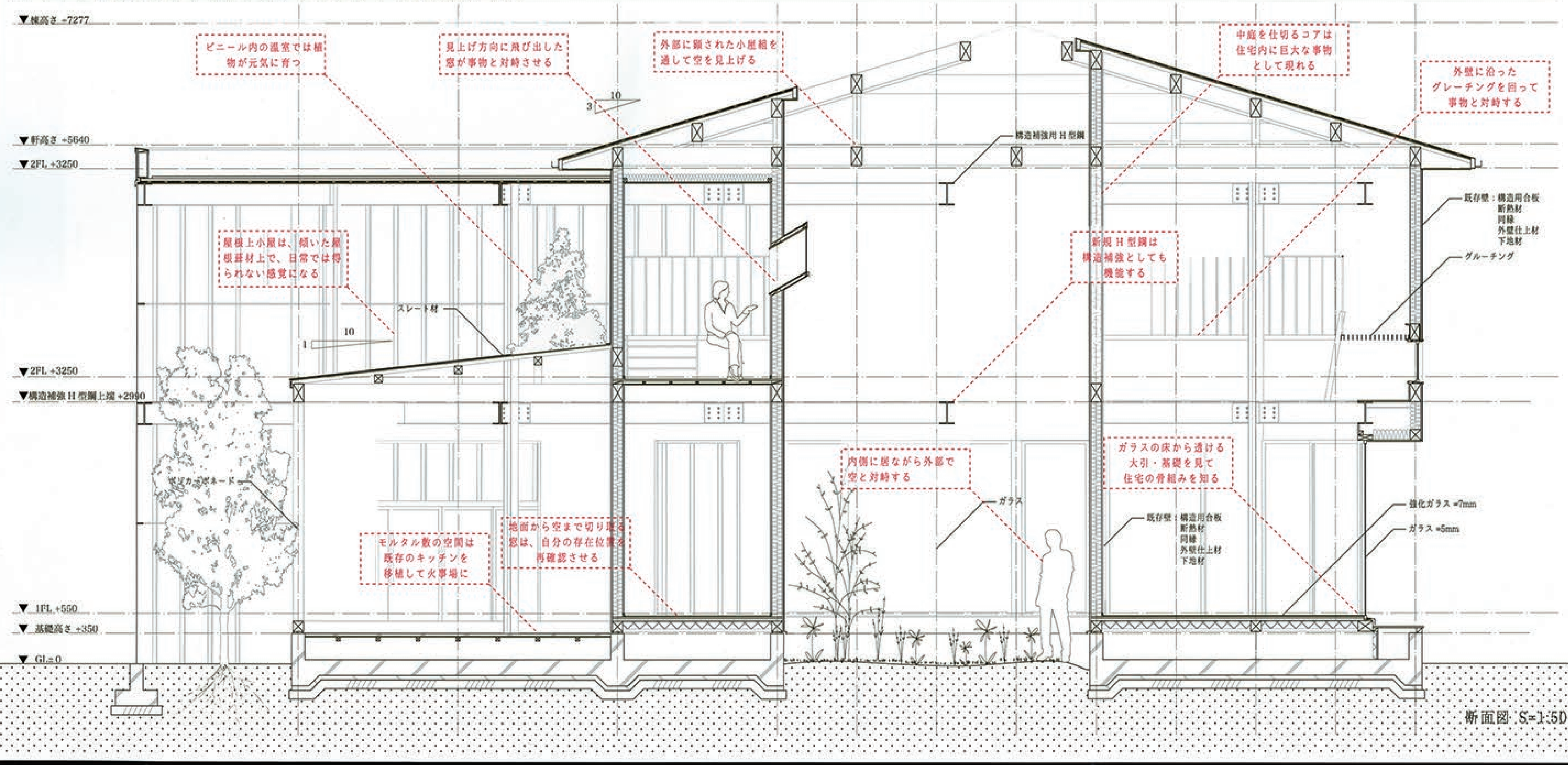
fig 提案の時間軸

事物に昇華した住宅の作り方と付き合い方 /diagram

空間構成は、住宅が役目を終え、漂白された時にただの事物として在る状態を利用した空間作ることを考えた。事物を纏め全体を構成する大きな秩序ではなく、事物がもつ小さな秩序を用い、小さな関係が互いに適応しながら作られる空間を目指した。

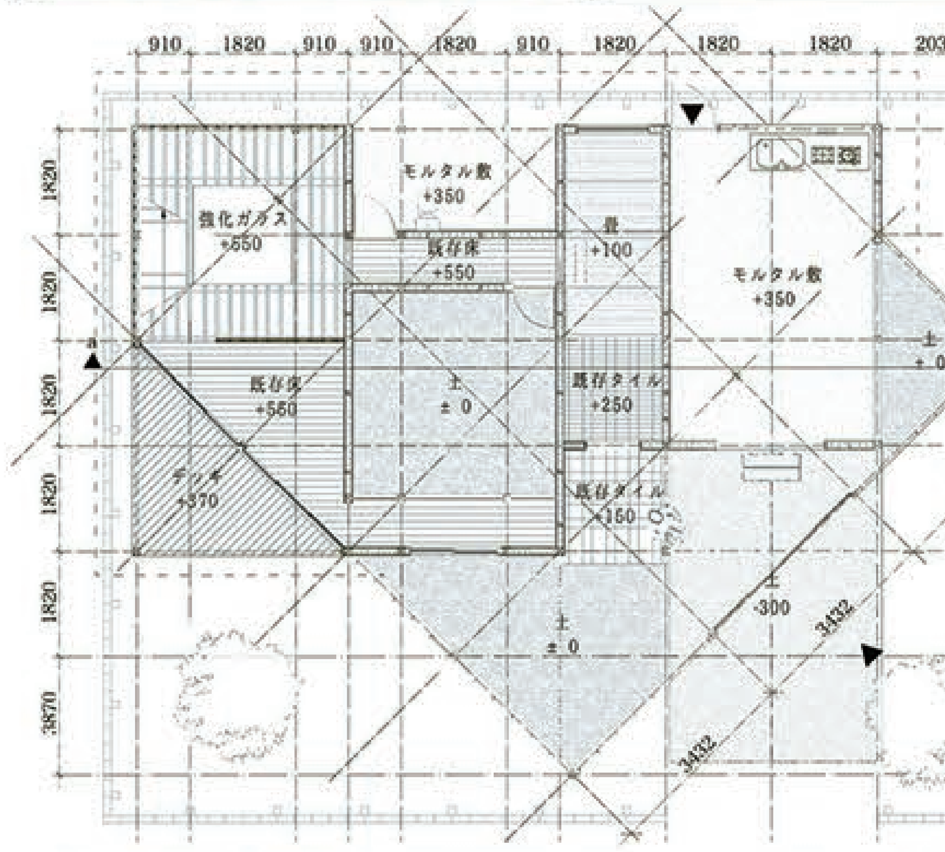


ヒトと事物が対峙するように、タネを蒔く /Sectional view

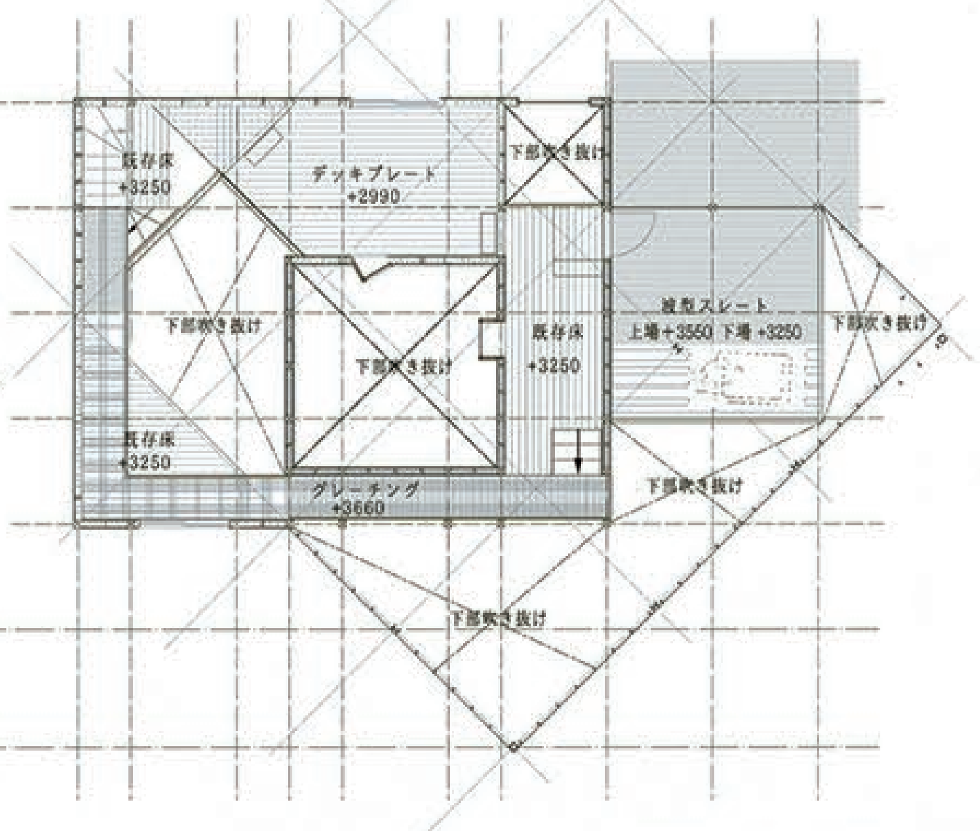


断面図 S=1:50

事物の小さな秩序で空間を作る /plan view



1F Plan S=1:150

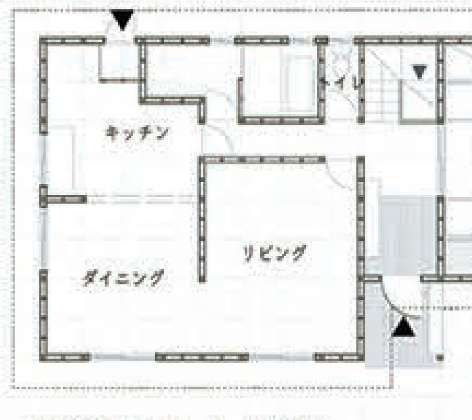


2F Plan S=1:150

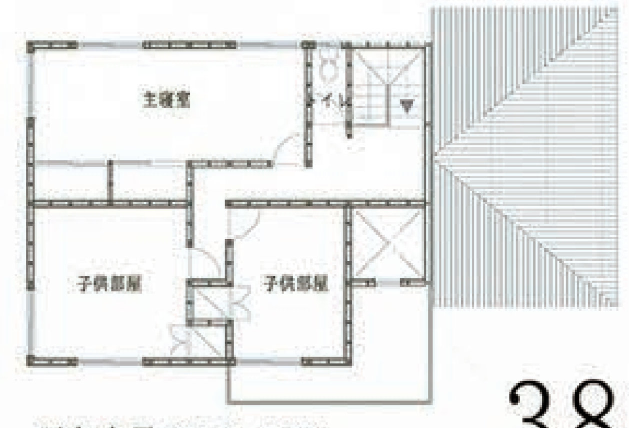
平面計画では、住宅を事物として昇華させるために行ったことは以下のことである。

- 床のマテリアルの分割と変更
- スラブの分割と新規スラブの挿入
- 既存グリッドに対して 45° 振れた軸に増築

床のマテリアルの分割・変更は、新規マテリアルの挿入、既存の床を基礎まで剥がし現しで使うことで行った。分割されたスラブは様々なレベルを持ち、新規に 45° グリッド上に設けたスラブと連続することで、視界が内側に向く。増築部に隠れ家的な屋根上部屋や、ビニールクロス貼った温室、既存部に設けた中庭は、視界を内側に導きながらも事物・環境に対峙できるようにと考えた。



既存家屋 1F S=1:200



既存家屋 2F S=1:200